

# 放射線正しい知識を

## 花北青雲高 講演や測定で理解



県立花北青雲高校(遠藤敏夫校長、生徒468人)のエネルギー講演会は5日、花巻市石鳥谷町の同校で開かれた。講師は科学ジャーナリストで筑波大非常勤講師の東嶋和子さん。生徒たちには各国のエネルギー事情や、放射線被ばくの正しい理解を促す知識を伝えた。講師選定に協力するなるとして東北電力社員に同校同窓会長がいる縁で企画され、同校の2年生157人が受講。東嶋さんは「一緒に考えよう。エネルギーのこと、環境の性について講義。経済効

①花北青雲高で講義する東嶋さん(中央)  
②講義に沿った校内の放射線を測定する生徒



率や安全性、地球環境に与える影響なども絡めて話した。  
エネルギーと食料の自給率に関する説明で、東嶋さんが「日本は食料自給率(カロリーベース)が約40%で話題になるが、原子力を除いたエネルギー自給率はわずか40%とのグラフを示すと、生徒たちは「そんなに低い」と驚きの表情。太陽光など圧力変動の大きい手法は化石燃料など安定的なバックアップがないと実用的でないことも説明され、高い関心を集めた様子だった。  
加えて東嶋さんは、エネルギーを生み出す発電所の事故で注目度が高まっている放射性物質についても紹介。放射線を出す能力が「放射能」であると伝え、懐中電灯の光を放射線、電灯を放射性物質とするなど、分かりやすく示していた。  
講義の中では、生徒たちが専用機材で放射線量を測定する場面も。数グループに分かれた生徒たちは職員室や教習後方、玄関口といった場所の数値を調べ、宇宙や大地などからの「自然放射線量」と比較した。このほ

か生徒たちは、生活のある。化石燃料の代わりにらゆる場面で放射線が利用されていることも学んでいた。  
受講した佐藤亜美さんは「日常生活では、小まめにコンセントを抜くなど、意識して節約意識していた。」「再生可能な自然エネルギーなどへの切り替えだけでは、やっていけないということが勉強になった」と話し、有意義な時間が過ごせた様子だった。